

葛（くず）の葉入中葛の葉だよりNO2（H30）

校章にある葛（くず）の葉、学校祭を「くずの葉祭」と言います。なぜ「葛（くず）」なのだろう、と思い校長室の宝物の中を調べてみた。

秋の七草の葛は「かずら」とも呼ばれ、蔓（つる）は作業用材に、根からとれるデンプンは葛湯（くずゆ）に、根を乾燥させたものは葛根湯として発汗・鎮痛作用が有り風邪薬として有名である。「葛きり」はこれからの時期、涼を感じながら楽しめる甘味だ。

さて、入遠野小学校は長者屋敷の跡地と言われている。平安時代、帝から京の都を追放された有宇中將ありうちゅうじょうが朝日郷（入遠野前田）にたどりつき、この地の長者から手厚いもてなしを受けた。その後もここで暮らすようになった中將は長者の姫と結ばれ、猿若丸という世継ぎが生まれた。

14年間行方知れずの中將に会いたい母君は帝に嘆願し、ようやく追放を解く許しを得た。家臣の平子左近は使いとなって方々を探し回り、ようやくこの地で中將を捜し当てたのだ。その後中將と長者一家は都に住むようになり、帝は平子左近たいらこきこんにこの地を下賜した。この地の領主となった左近は、見渡す山並みが生まれ故郷の山城国葛野郷によく似ていることから、左近はこの地を「葛野郷」と呼ぶようにしたと伝えられている。

（参考 いわき地域学会図書2 わが町ウォッチング 伝説「朝日の里」平子左近の物語 （佐川義文氏））



入遠野のむかし 1 入中葛の葉だよりNO3 (H30)

大同2年(806)から建久4年(1193)までの380余年、平子氏の領地だった入遠野、当時の領主、平子平馬が鎌倉で討ち死にした。翌年から平城主・岩城氏の領地となり、葛野郷という呼び名を改め遠野郷と呼ぶようになった。遠野郷は、入遠野・根本・大平の3つに分け以降領主は上遠野氏・駒木根氏と代わり統治してきた。

徳川幕府の時代になると、その一部は、棚倉藩の領地(飛び地)となった。徳川時代の後半は、入遠野の八分は幕府領となり、今の塙町にあった幕府の代官所が治め、二分は棚倉藩領となった。棚倉藩領時代に折松川を堰き止め行った治水事業と新田開発については、入中近くの忠魂碑がある入り口の立て看板に記されている。

ちなみに塙代官所は、45人の代官が赴任しており特に23代寺西封元は名代官で、現在の塙町の町おこしにも一役を担っています。〈参考 「入遠野郷土史」大正元年10月〉



入遠野のむかし 2 入中葛の葉だよりNO4 (H30)

明治時代当初は、この地には3村があり入遠野村は佐藤・平子、上根本村は小澤・永山、大平村は上遠野、吉田、芦間、鈴木の各氏が庄屋であった。

明治4年に廃藩置県が行われ、明治5年には磐前県の所轄となった。当時は区会所政治で県を5大区に分けその下に小区を置いた。このあたりは会所のある上遠野を中心にして、西北は入遠野石住から南は大林、井上村まで16ヶ村があった。入遠野は、第1大区第18区に属する。

明治9年福島県の管轄となるがこのあたりは菊多郡植田区会所の配下であった。入遠野村には1名、上根本村には4名、大平村には4名の「用掛」と呼ばれる役職が置かれた。

明治22年4月、町村制が実施され、入遠野村、上根本村、大平村の3村が合わさって入遠野村と称するになった。



入遠野の社会状態 入中葛の葉だよりNO5 (H30)

一般に質実、勤勉かつ簡素な生活に耐え、衣類は質素で華美ではない。通常は綿服の長着、仕事着として股引、襦袢（筒袖）である。

言語は標準語に近く難解な方言、訛は聞かない。 宗教は、真言・臨濟・曹洞・日蓮と天理教・天津教を進行するものがあるが特殊なものを除いて信仰心は深くない。

村は村長を中心に全村が5区に分かれ、各区に区長がいる。

明治35年度には383戸、人口2754人であるが、その後、昭和9年には戸数763戸、人口3925人に増えた。その原因としては殖産興業が盛んになり、他から転籍するもの、分家するものが多くなったためである。

入遠野の生物

獣類

【有益なるもの】

馬～家ごとに飼育 357頭あり

牛～飼育はなはだ珍しく 6頭

豚～飼育が盛んでなく偶々見る程度

【有害なるもの】

野鼠 家鼠 川鼠 栗鼠 野兎 狐 狸 もぐら

鳥類

【有益なるもの】

鶏 家ごとにほとんど飼育 3510羽

家鴨 飼育はなはだ珍しい

【有害なるもの】

雀 カワセミ 鳥

魚類

鯉 鮒 金魚 鰻 鱒 岩魚 山女 追川 鰻

は虫類

まむし とかげ やまかがし あおだいしょう

ちむぐり なめら

両生類

いもり あまがえる あかがえる かじか

〈参考 「入遠野郷土史」大正元年10月〉



校歌から考察するわが入遠野 1 入中葛の葉だよりNO6 (H30)

阿武隈山の山なみの かこみてひろき入遠野

秋の実りに人は足り 秣ゆたかに馬は肥ゆ

ここに生まれし少年の 胸には燃ゆる希望の火

我が入遠野中学校

▲阿武隈山の山なみとは宮城県南部から茨城県北部まで連なる阿武隈山地で福島県中通り地方と浜通り地方との境界線となっている。阿武隈川・久慈川・太平洋に囲まれた紡錘形をした比較的なだらかな山地である。阿武隈高地は海底で堆積した大変古い地層が隆起して陸地となり、かつて海底にあったことを物語るものに、田村市滝根のあぶくま洞などの鍾乳洞、いわき市四倉のアンモナイト、フタバスズキリュウなどの化石産出地などがある。

▲かこみてひろき入遠野の地に入るには、東からは三大明神山を越し、北からは往生山を越し、西は宮本村から、南からは御斎所を経なければならない。入遠野中学校の標高は137mである。

▲秋の実りとは、主要産業の稲作のことであろう。

▲秣豊かに馬は肥ゆ、の「秣」を「まぐさ」と読める中学生は入中生以外ほとんどいないのではないか。牛馬の資料となる枯れ草、かいば、のことであるが、実は現在の入中生にとってもその意味理解は難しい。もともと馬産地であったが馬格改良の結果、良馬が益々増産され毎年二歳馬の産出は130頭前後であった。まさに馬は一家の宝であったはずで、この地に馬頭観音の石碑が多くあることも頷ける。

▲校門の一方にも深く刻まれている、ここに生まれし少年の 胸には燃ゆる希望の火、とは入遠野の地に生まれ育ち誇りを忘れずに、志高く世に貢献する人となれ、との願いがひしひしと伝わってくる。郷土の子どもを大事にする思いは入遠野の先人の方々も現在の保護者の皆様も変わりはない。それは入遠野の地にある学校教育への期待そのものであり、我々が果たすべき責務の重さをかみしめる詩である。 (参考:入遠野郷土誌・ゼンリン地図)



校歌から考察するわが入遠野2 入中葛の葉だよりNO7 (H30)

往生山の峰高く こころは高くもてという

清き流れの遠野川 清さ保てと声と拳ぐ

澄める空気を吸いつつも 学べる者の未来見よ

我が入遠野中学校

▲往生山（標高 599m）から月石山にかけて 400m級の山々が北東に走っている。「お山」と親しまれ数々の信仰の山にふさわしい往生山を中心に阿武隈山地が入遠野を袋状に囲んでいる。

▲入中からもそのひとときわ高い往生山の威容が望まれる。ここに生まれ学ぶ少年たちよ、あの往生山のように志を高く持つのだ。

▲入遠野川は古殿町大久田字馬塚平の尾張新田を源として入遠野・大平のほぼ中央を南流して鮫川に合流する。清流入遠野川は入遠野地区内だけでも 13.5km の全長を持つ。生活の場（「つかい場」と言った）貴重な農業用水、そして豊富な川魚や蛍の棲みかである。清流のせせらぎは、音としていつになっても今の清らかな心を忘れてはなるまいぞ、と伝えているのだ。

▲至る所に歴史の息吹があり、豊かな山河に囲まれたこの地の清らかで澄んだ空気を胸一杯に吸い込み育つ少年たちよ、希望を忘れることなく向上心持って学ぶのだ。



わが町ウォッチング入遠野1 入中葛の葉だよりNO9 (H30)

入遠野地区には入遠野、上根本、大平と三つの旧大字があり、入遠野川は古殿町大久田字馬塚平の尾張新田を源として、入遠野・大平のほぼ中央を南流し、上遠野境で鮫川と合流する。

入遠野川の左側を走る県道小野線のバス終点を入定（にゅうじょう）という。入定とは禅の定に入ること、高僧が成仏（死去）されることを指す。バス終点の小高い丘に今から1200年前、平安仏教に大きな足跡を残した法相宗の高僧、徳一の御入定所（墓）がある。徳一は最澄としばしば法論を交え、空海から教を請われたという。このあたりにはさすがに徳一にまつわる伝説が多い。近年、御入定所が知れ渡り市内外から巡拝者が来所するようになった。

（昭和63年4月25日初版より）



わが町ウォッチング入遠野2 入中葛の葉だよりNO10 (H30)

入定の入遠野川から下流に2km下ったところに円福寺がある。このお寺の左側の台地（畑）は縄文遺跡で、和歌城といわれる館跡でもある。上遠野の地名と上遠野姓の発祥地といわれるこの複合遺跡からは今も縄文土器片が出土する。また、ここから800m登った所に八坂神社があり、かつて村社として栄えた。この境内にそびえる二本杉は樹齢1200年といわれ、県指定の天然記念物である。世の移り変わりを年輪にして樹勢ますます盛んである。

入上より2kmほど下流の県道沿い、落合堰の左岸あたり周辺を眺めて欲しい。北に599mの往生山を中心に阿武隈山系が入遠野を袋状に囲んでいる。昔、特にこのあたりの中屋川には小魚が豊富に棲み、鮒が群生していた。また平家ボタルの群生地でもあった。年によっては下流の下中根とともに、ボタン雪が舞っているのかと見間違ふほどに、ホタルが群れ飛び交ったところである。（引用：昭和62年6月19日 いわき民報 佐川義文氏）



わが町ウォッチング入遠野3 入中葛の葉だよりNO10 (H30)

校歌三番にある入遠野を代表する社が八坂神社である。八坂の二本杉は案内看板もあってすんなり行かれるかと思っただが、案外苦勞した。台風 20 号の後だったので杉枝が社殿までの階段を覆っていた。階段の左右の杉も太くこれか？これか？と探していったが、やはり社殿横にそびえ立つ当の二本杉には圧倒され、しばらく開いた口がふさがらなかった。長野の戸隠神社奥社へ出かけ際、有名な樹齡 400~1000 年の杉並木を歩きながらその迫力に己の小ささを顧みだが、八坂神社の二本杉からも信仰の対象としての尊嚴に満ちた大きな力を十分感じ取れる。入中でも行ったことがない生徒が複数いる。体験とは「行動+みること」だと考える。『行ってみる、聞いてみる、食べてみる、さわってみる、見てみる、嗅いでみる』そこが地域を理解する一歩目で、探究や深い学びはその次に待っている。(川上)



御齊所街道 入中葛の葉だよりNO11 (H30)

伝説に旧跡御齊所峠は第 50 代桓武天皇の頃、坂上田村麻呂が東夷征討の折、対岸を挟み峻険を押しして戦った地と言われる。戦いは不利になったが信仰厚い紀州熊野権現の導きにより勝利を収めた。のちに將軍は山頂に熊野神社を勧請して、当地方の鎮護神としたと言われる。神鎮まる霊地の意が御齊所山 (392m) である。熊野神社をかいま見ながら走る崖道が御齊所峠となり御齊所街道となった。

江戸時代にこの峠路は「塩の道」として重要な使命を担ってくる。峻険な崖路を曲折しながら進み、やっとの思いで鮫川に別れを告げて竹貫に出る。さらに石川を經由して棚倉へ、または白河・須賀川を通り会津や栃木方面に続いていた。

御齊所街道は、阿武隈高地の懐(ふところ)では鮫川がつくった隙間にねじ込み、縫うように続く。田人町石住字才鉢から遠野町根岸の間約 6km は、御齊所変成岩と呼ばれる硬い岩盤が発達し、そのため浸食が進まず御齊所溪谷と呼ばれる峡谷が連なっている。さらに幾つもの急峻な沢が鮫川に向かって流れ込んでいるため、古い時代には川の流れる谷底に道を通すこともできず、道は眼下に深い断崖を見て縫うような細い山道となっている。おまけに勾配がきつく、道はその都度谷壁を上下し、さらに七曲がりして迂回(うかい)、鮫川になだれ込む谷にはいくつもの木橋を構築しなければならなかったのだ。

(参考引用：いわき市HP・佐川義文氏「御齊所街道・いまむかし」)



入遠野名物・名所・遺跡 入中葛の葉だよりNO12 (H30)

■間知石 (かんちいし)

入遠野産の御影石を石垣用に小割りしたもの。きめ細かで硬質、鮮やかな色感を持ちその石垣は堅牢かつ幾何学模様が美しい。

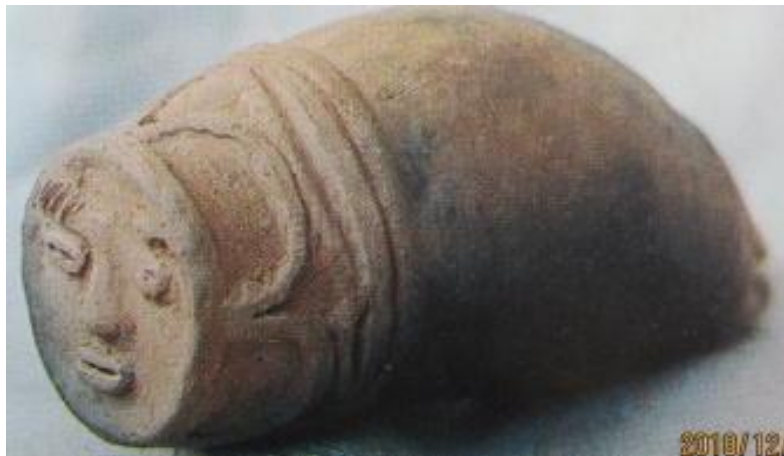
■必見大木ベスト3

1位 八坂の二本松 2位 熊野神社のムクロジ

3位 東光寺の大イチョウ

■冷水遺跡の人面付石器

上根本字冷水地区出土、縄文時代末(紀元前 2000 年)の物とされ、東京国立博物館に陳列されている。これほどはっきり人面が刻まれている石器は国内でも珍しい。〈平成3年・18年遠野パンフレットより〉



入遠野と楮（こうぞ） 入中葛の葉だよりNO13（H30）

江戸時代、幕藩体制が整備されてきた1622年、入遠野は棚倉藩領の支配となった。江戸が生活文化の中心となって繁栄するにつれ、官民から紙の需要は高まるばかり。紙買い付けのために上遠野に常駐する商人、そして藩も収入を得るため自領の平潟港から船積みして江戸へ搬送した。貨幣経済が進んでいく中で入遠野の唯一の換金産業は楮（こうぞ）を原料とする和紙作りであった。和紙によって生計を立てていた農家の数は300軒ほどだった。楮は田んぼのあぜ道などわずかな土地でさえ余すところなく植えられた。しかし自家製の楮では賄いきれず近くの村々から共同で仕入れるようになっていった。その収集を取り仕切った者は、代官所から許しを受けた仲買人である。取引量が増えれば値が上がり、仲買人の利ざやも増えてくる。

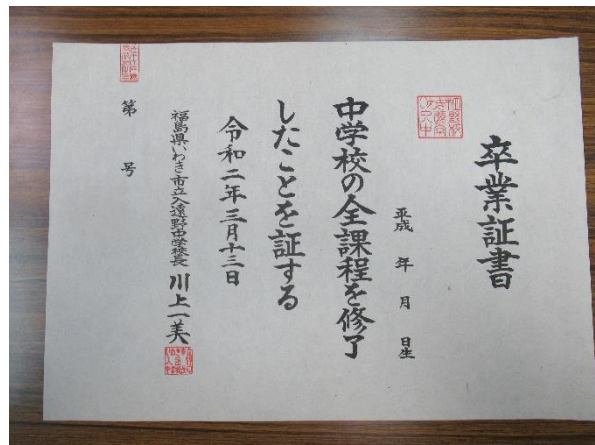
困窮した入遠野の農民は、苦衷を代官所に訴え異常な値上りを抑えてもらおうとした。この時、代表に選ばれたのが、人々からの人望が厚かった入遠野字東山の平子重郎平という人である。一村の死活にかかわる重大な問題を訴えることは、一身をなげうっての行いである。

重郎平は棚倉藩へ越訴し窮状を訴えた書状と共に真実を吐露してこの解決を願い出たのである。

そして越訴した帰り道、後をつけてきた武士の刃に果てた。村人は事の次第に驚きながらお上の非情にみな哭いた。重郎平の亡骸は菩提寺の東陽寺と自宅の墓に分けて埋葬された。この時の住職の計らいで境内にある代々の住職の墓と並んで埋葬される厚遇を受け荘重な葬送が営まれた。

今も東陽寺境内の五輪塔の中ほどに、自然石に「一圓宗翁信士」と刻まれている墓石がそれである。一圓とは、仏教では大変重い意味を持つ言葉で、一つの事を成し遂げた人を讃えておくる法名だそうだ。

（引用：昭和62年9月12日 いわき民報 佐川義文氏）

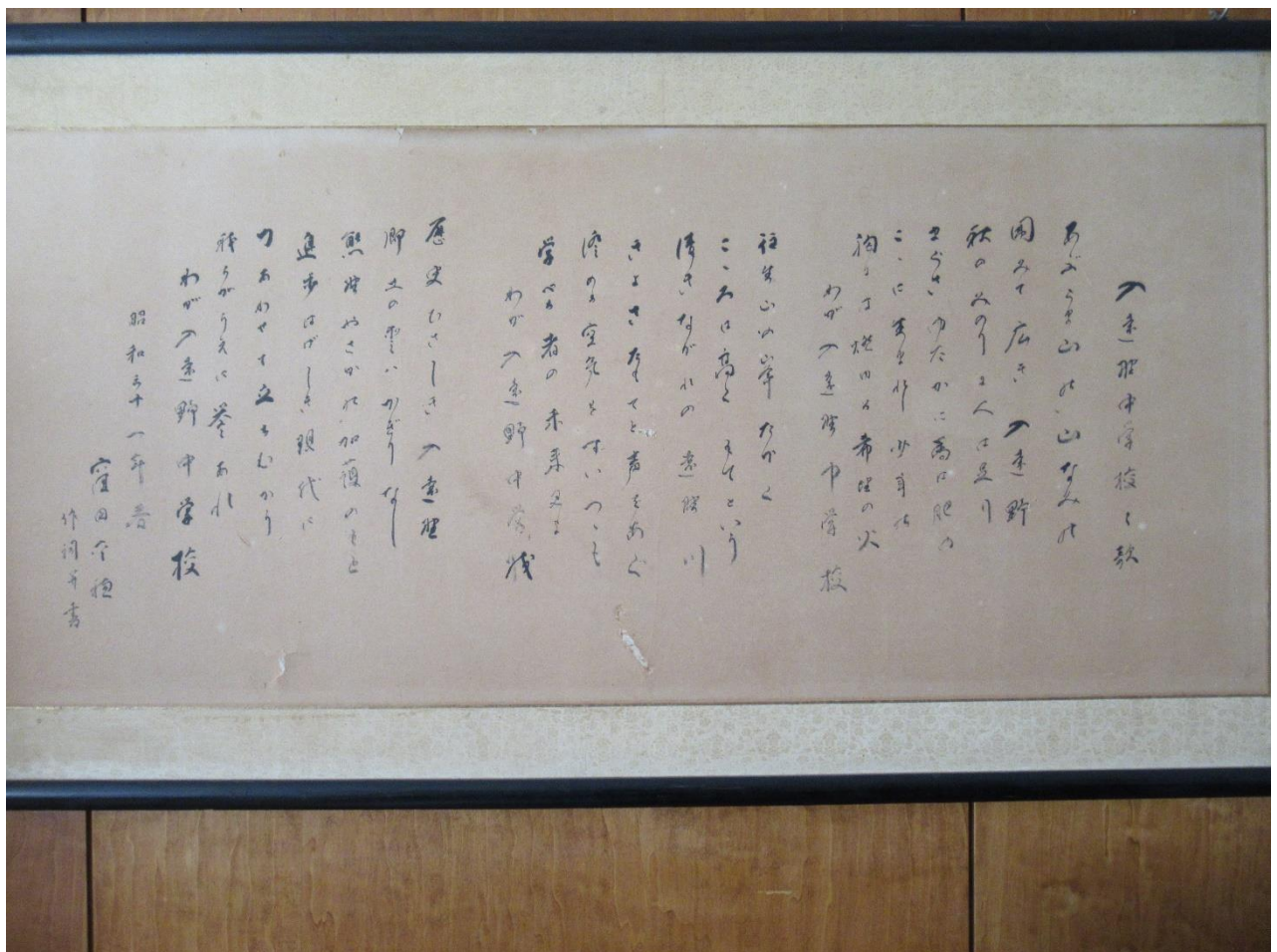


入中校歌物語 1 入中葛の葉だよりNO14 (H30)

どんな流行歌があろうとも、世代を越えても、また同級会でもよき思い出を胸に抱きつつ声高らかに歌えるのが校歌です。今年度巣立つ13名にも校歌を要諦に入遠野中学校卒業生であることに誇りを持って欲しいと願っています。まことによい校歌です。

校歌は昭和31年に制定されました。入遠野・上遠野の両村が合併して校名も村立から町立に変わったばかり。入中PTAでは一刻も早く校歌を創る気運が高まりました。その様な時に國學院大學を卒業され大平の熊野神社の宮司を務めながら入中で教鞭を執られていた芦間直輝先生がいました。ある時、「校歌の件ですがよろしかったら私の恩師に国文学の権威で知られる窪田空穂先生という方がおられるのでその先生にお願いしてみましようか。」と言われました。PTAとしては渡りに船のお話、一切をお願いすることとなりました。校歌を作詞される方は殆どが現地を訪ねて自然、風土、環境や住民性まで見聞されることが多いのですが、空穂先生は健康上の理由でそれが叶わず、資料は全て直輝先生が作ったそうです。作曲は当時コンビの間柄であった小村三千三先生になりました。小村先生をお迎えして校歌発表の日、入中生300余名、地域の学校を何よりも大事に思う保護者200名以上が集い、盛大な校歌発表会が催されました。

(参考：平成9年3月1日発行創立50周年記念誌 第8代PTA会長 平子麒之助様寄稿文より)



遠野と馬 入中葛の葉だよりNO16 (H31)

【今年度 はじめに】

校長室にある貴重な記録を参考にしながら、学校へお越しいただいたOBの方からの聞き取りや好んで出かけるフィールドワークなどを含め、平成30年5月号から入遠野について記事にしてきました。物事の良さに気づくためには、手に取ることが一番です。今年も皆様からのお話や情報をいただきながら、自助努力を怠らず、入遠野と入遠野中のよさを再発見していきたいと思っています。もちろん、在籍している34名の生徒諸君にこそ入遠野のよさを最も実感して欲しいことは言うまでもありません。

豊かな心は、郷土の風土、歴史そして人々によって育まれるものであります。

今年度も探究や地域の域の皆さんの交流の楽しさを共学していきます。(川上)

さて入遠野を歩いてみると、「馬頭観音」「東堂山」の石碑が多くあることに気がつく。それは、遠野の地が昔から馬産地として馬市場がたち、セリ市では大いに賑わった。馬は従順かつ力のある働き者で堆肥を作り、子を産む。家族の一員として大切に飼われてきた。天明八年(1788)の巡検使調に、根岸村人口495人馬50疋、上滝村人口431人馬35疋、下滝村人口412人馬28疋と記録された。大正元年編纂の入遠野郷土史では「馬、家毎に一頭ないし二頭を飼い総数357頭あり」と記されている。校歌に「秣ゆたかに馬は肥ゆ」とあることから昭和30年代前半の馬産のピークに至るまで、当地における馬と人々の暮らしの関わりの深さがよくわかる。

田村郡小野町の東堂山萬福寺には牝の御神馬像が祭られ、根岸大藪の瑞念寺(焼失廃寺)境内の馬頭観音と堂内にあった若駒の御神馬像の両方を参詣し本願成就すると、当地では言い伝えられてきた。

(参考：平成16年11月27日 いわき民報 佐川義文氏)



クマガイ草 入中葛の葉だよりNO17 (R1)

今年も多くの人を訪れた綱木地区。住所は田人町だが、遠野町からしか行けない。日本最大級の5万株ともいわれるクマガイ草が毎年5月の下旬から中旬にかけて咲き誇る。故平子長雄さんは、奥さんが亡くなった淋しさから自宅の裏山にクマガイ草を植え育てたのが始まりと言われており、地域住民が手伝い大事に育ててきた。現在は「綱木クマガイ草を守る会」が発足し手入れを続けている。道路の整備も進められており、大平か西山のいずれかを経由し綱木地区に行くこととなる。地区内には駐車場も整備されている。(参考:いわき遠野マップ)

平成31年5月、本校職員の佐川敏行さんに入遠野から西山を越えて綱木地区に案内してもらいました。一度自力で大平地区から不慣れた細い道に緊張しながら運転し車で行ったことがありました。さて、守る会の皆様の行き届いた手入れのおかげとタイミングが良かったので満開のクマガイ草を愛でることができました。平成30年度入学の入中一年生は入小6年生の時に歩いて綱木地区までクマガイ草の見学遠足に行っています。現在は綱木地区からの児童生徒はいませんが入遠野小、中学校へ児童生徒が通学していた歴史があります。平家落人の里、塩の道、そしてクマガイ草のある地域から多くの生徒が山を越えて本校まできていたことを想うとき、教育の果たすべき役割、地域との結びつきの大切さを再認識し胸を熱くしました。(川上)



同窓生からの贈り物 入中葛の葉だよりNO18 (R1)

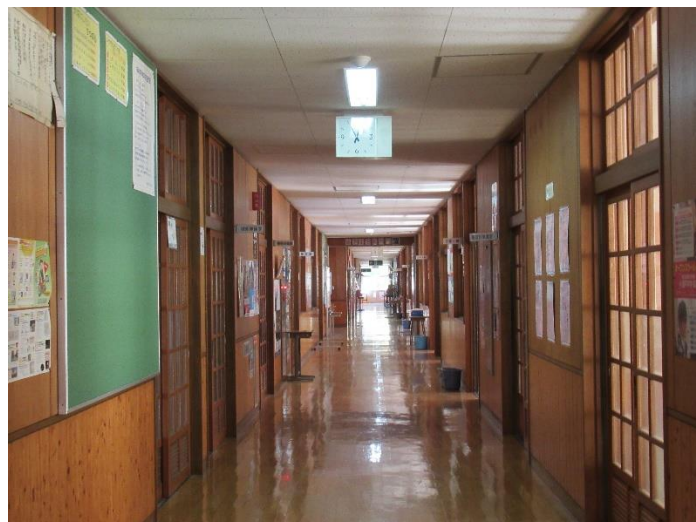
1992年（平成4年）6月27日、入遠野中新校舎（現在の姿）落成記念式典が開かれました。総工費は4億7千万円。窓が大きく明るい光の中で木目が美しく、129名の生徒が学んでいます。（民友記事より）

今回この記事をもとに調べてみると、昭和25年の卒業生有志の皆さんからは校舎壁面の大型屋外用時計、昭和37年の卒業生有志の皆さんからは正門脇にある校歌碑、昭和38年度卒業生有志に皆さんからは「福島県いわき市立入遠野中学校」の表札の寄贈がありました。これらは現在も入中に欠かすことのできないものとして利活用しております。現在入中で学校生活を送る生徒、教職員、保護者の皆様にもお知らせし、我が校の歴史と卒業生の母校愛の深さを見つめる機会としたいと考えます。



活躍される入中同窓生 入中葛の葉だよりNO23 (R1)

11月20日まで、上遠野「ミモザ」で絵の個展が開かれていました。画家は入中卒業生の大沼博暉（おおぬまひろてる）さんです。昭和44年パリに渡りエル・グレコの絵と出会います。グレコの作品がスペインに多くあることを知り、トレドに行きます。トレドではグレコの絵の模写に没頭しその後トレド市民となり古都を克明に描いてきました。今回もスペイン大使館後援で「サンティアゴ巡礼路の一部」の絵を鑑賞することができました。トレドでは大沼さんの名を知らぬ人はいないほどの著名な方だそうです。受賞歴も多数あり、マジョルカ島美術館、奈良市、トレド市が作品を買い上げています。志を高く持ち、努力を積む大切さを先輩は私たちに教えてくださっていると感じます。



入中校歌物語 2 入中葛の葉だよりNO25 (R1)

入中の校歌は昭和31年にできあがりました。

作詞者の窪田空穂先生と校歌ができるまでの経緯については、葛の葉だよりNo14で記しました。今回は作曲家の小村三千三先生についてです。

1900年神奈川県三浦市三崎町生まれ、1925年に東京音楽学校ピアノ科を卒業し、現在の両国高校教諭となりました。その後宝塚音楽学校や東宝芸能学校教授として活躍されました。世に知られている童謡「歌の町」や「待っててね」「グッドナイト」を作り、1975年に亡くなられています。

小村先生は入中校歌発表会前日、湯本温泉吹の湯に投宿され、当日は生徒、保護者合わせて500名以上が集まり盛大な校歌発表会が催されたそうです。

昭和30年度以降の卒業生は昨年までの入中卒業生は、4013名です。入中生34名は、同窓生の皆様と同じく声高らかに誇りを持って校歌を歌っていきます。今年度14名が卒業します。同窓生は4029名となります。



鮫川石^{入中葛の葉だよりNO27 (R2)}

御齊所街道を古殿から遠野に向かい鮫川の流れをみるとある場所から石の色が青みがかり、入遠野川ではどこでも青色のきれいな石が川畔、川底にあり清流の美しさを引き立たせると思っていました。そこで鮫川石について調べてみたくなりました。

まず古殿町竹貫^{たけぬき}といわき市遠野では岩石の変成の仕方が異なります。遠野では圧力が高く、温度が低い状態、古殿では圧力が低く、温度が高い状態でできたので、色合いも違った鉱物になります。また岩石土砂の性質も異なり、遠野は太平洋の底にたまった岩石が移動し熱で変成したものです。調査によるとジュラ紀に溜まった地層が白亜期（約1億4,500万年前から6,600万年前）に変成したと考えられています。古殿ではまだ阿武隈高地がない頃、アジア大陸の端から移動してきた土砂・岩石が変成したと言われています。入遠野には枕状溶岩（ピローラバー）という岩石がありこれは海底火山や海の近くの火山から溶岩が海中に流れてできた証拠です。

鮫川石と言っても入遠野のものは独特の美しい青緑色で庭石としても珍重されてきました。

かつてここ入遠野は海の中だったと想像でき、悠久の時の流れを経て地球の息吹が作り出した美しい鮫川石に囲まれ、幾つかの清流が流れる山紫水明の土地、太古のロマンに満ちたふるさとです。

東京国立博物館所蔵となっている誠に稀有な縄文時代の冷水遺跡^{ひやみず}から出土した人面付石器、京の都と類似した多くの地名や有宇中将と朝日姫の伝説、4年に一度の大山祇神社の大祭、棚倉藩や塙代官所がこの地の優位性を認め水路を築き新田開発を進めたことから魅力ある土地であることがわかります。また伝統産業となった遠野和紙にまつわる楮騒動、平子重郎^{たいらこじゅうろう}平の武勇伝などからも歴史の豊かさを実感できるどころです。

縁あってこの地に生まれた少年少女たちには、入遠野で育ったこと、入中で学んだことに誇りを持ってもらいたいと願っています。そのためには地域の皆様の協力を得ながら、これからも地域理解を深め、地域の人や行事と関わり、入遠野のよさを実感できる学習を進めてまいりたい所存です。



